座談会　タイ軍政の限界を露呈　読売新聞-1992.05.22

現状と展望　専門家座談会

タイ軍政の限界を露呈

経済成長にひずみ
新「中間層」が台頭
根強い国王の威信

流血の惨事にまで発展したタイの民主化要求勢力と軍を背景としたスチンダ政権の衝突にプミポン国王が二十日ついに介入した。過去、政治的対立が頂点に達した際、国王は常に最後の調停者として登場してきた。タイ政治の伝統は依然生きているのか、あるいは変革の時を迎えているのか。三人の専門家を招き、現状と今後の展望を聞いた。（敬称略）

出席者
中嶋嶺雄　東京外大教授（国際関係論）
村嶋英治　成蹊大助教授（タイ現代史）
安田　靖　野村総研理事（タイ経済）
（五十音順）
司会・石川弘修本社外報部長

——今回の政変の社会的、経済的背景は何か。

村嶋　九一年二月の軍クーデター後、暫定憲法が発布されたが、この十数年間に、タイ社会はがらりと変わった。急速な経済成長によって多くの中間層が生まれたが、一方で、成長に取り残された下級官吏や民間企業の職員なども現れ、双方が共に軍部の政治介入に不満を表明し始めた。

安田　軍部はこれまで、「タイの近代化を支えてきたのは自分たちだ」という自負心を持っていた。しかし軍部は、経済の高度成長によって生じた所得格差の拡大に対処する手段を何ら持てず、ただ焦るばかりだった。また、行政改革などで天下りのポストが少なくなっていることに、軍部自体が欲求不満を募らせていることもあった。昨年の革命は汚職追放が大きな争点だったが、政権側はそれを無視してしまった。ここに重大なつまずきがある。軍の実力のなさ、汚職が横行しているという実態、そして自負心が空回りしているということを国民は知っていたのではないか。

中嶋　タイの成長ぶりは均衡を欠いており、社会基盤の中に、ある種の軍事的権威主義体制が見られた。しかし中間層の成長によって、政治に軍が介入するパターンがそろそろ終わるのではないかと期待している。

安田　タイ国民も、軍部に支配されている政治にかなり拒否反応を示すようになった。従来の反政府デモは学生が主体だったが、今回のデモは、ビジネスマンが携帯電話を持ってデモに参加するという現象もみられた。これは「ハイテク・デモ」と呼ばれた。また、これまでデモの牙城（がじょう）だったタマサート大学以外の地域にも及んだことが非常に重要な点と言える。デモ隊は公共の建物は破壊したが、デパートなどの略奪はほとんどしなかったのではないか。かなり意識の高いデモだったと思う。

タイ情勢について話す（左から）村嶋氏、安田氏、中嶋氏（右端は石川外報部長）

村嶋　タイの軍部に新しさを取り入れるだけの変化がなかったのでは。そのため、きわめて強引な権力志向だけが、クーデター以降はっきりでていた。いろいろな集会を、強引に抑えつけ、終始一貫して「やれるならやってみろ」といった態度をとっていた。

——軍内部の反主流派などが、新しい市民層の意識に密着し野党側につくことはなかったか。

村嶋　それはなかった。タイの場合には民主主義か独裁かといった単純な二分論。学生を含めた市民にとり、軍イコール独裁者であり、軍人であっても軍服を脱ぎ選挙に出ればいい。軍人が現役のまま、あるいは選挙を経ないで軍をバックに権力につくことが独裁で、選挙で出た人はみんな民主主義になる。

村嶋氏

——軍内部の勢力関係は。

村嶋　タイの軍隊はバンコク周辺に第一軍管区があり四師団いる。今、陸軍司令官はイサラポン氏だが、イサラポン氏とスチンダ首相は義兄弟。一族で第一軍管区とその下の師団長クラスを押さえる形だ。一族以外の人は地方にいるのだと思うが、これだけしっかり握られていると、周辺部からの軍事力だけではとうてい勝ち目はない。

——スチンダ首相は共産主義の脅威などを訴えたが、軍の国際政治情勢に関する認識はずれていないか。

村嶋　それは国内的な理由で、相手を中傷するためのもの。スチンダ首相自身、アメリカの参謀学校を卒業するなど、国際的な認識は十分持っている。タイでは冷戦時代から、軍が市民勢力を弾圧する際、コミュニストのレッテルを張るのが一般的だ。状況は変わってきているが、軍部がほかに正当化の根拠を見つけられないでいる。

安田　共産党というレッテルを張って政敵を負かすのは、かつての日本でアカのレッテルを張ったのと同じだ。

中嶋　世界的に脱社会主義、共産党体制の崩壊が進んでおり、中国でさえ天安門事件のような形で、再び軍がすべてを抑えきるのは難しいと思われる。今回、経済的発展が目ざましいタイでこのようになったのが衝撃だった。

村嶋　今回の事態が軍人に大きな教訓を与えたのは事実だ。「軍部が政治を握るのが当たり前」という考え方が、反発を受け、状況が変わったことを学んだのではないか。

安田　なぜ、スチンダ政権は譲歩しなければならなかったか。その理由が、中間層の出現にある。そのことを頭の中で分かっていながら、武器を使ってしまった。もう一つ、今回は、反政府側に、チャムロン氏というスターが存在したことがこれまでとの大きな違いだ。彼は、汚職にはクリーンであり、バンコク知事として行政手腕も発揮してきた。その点が、軍部側の読みを誤らせた大きなポイントだった。それゆえに、国王の前での二人の握手で、事態が解決に向けて急展開する可能性が高い。

安田氏

村嶋　これまでの民選議員たちは、クーデターが起こると逃げ隠れしてしまい、武器の前には抵抗不可能だと、言い訳してきた。軍と対抗しようなどという発想はなかった。ところが、軍人出身のチャムロン氏とかチャワリット氏らは、軍の中でトップを経てきた人たちで、軍に遠慮もなく、十分対抗できるとの意識が強かった。それが、今回の特殊事情だ。

——国王の役割に、これまでとの違いは感じられるか。

村嶋　タイ国王は立憲君主で、命令する実権はなく、軍の統帥権もないが、現在の国王は威信があり、その助言が有効に働く。

安田　国王が一番やりたくなかったのは、現在のスチンダ氏をそのまま認めることだったろう。スチンダ氏は、昨年のクーデターの際、それが民生への一歩であり、汚職議員を追放し、自分は首相にならないという三つの約束をし、それをすべてホゴにした。おもしろかったのは、国王の前でチャムロン氏が農民服を着

たままだった
中嶋　トラ
度に、最後に
るという国王
は、今回の事
新しい中間層
熟とも合わせ
出てくるので
の一つの象徴
氏の農民服
う。
安田　一番
直訴スタイル
そろそろ終わ
はいけないと
私自身、国王
伴ったことが
は、農民にと
訴の場だった
不満解消の方
は国王への直
る。現実には
消のシステム
ることが必要
それは相当
仕事だ。
村嶋　タイ
る中心とい
ることによ
イの父親で
作りだして
大戦後のタイ
ると、そう
ったと思う
までも必要
い。
安田　タ
心力として
ている。し
いシステム
も、国民の
深く根づい
は難しい。
はりやらな
い。
——国王
生革命のと
き、七六年
は学生の反
王の思想基
のか。
村嶋　タ
イアムセメ
ら上がる収
る立場にあ

タイ民主化、政治闘争年表

1932年	人民党の無血革命で立憲君主国となり、議会制民主主義の時代始まる。
1958年10月	サリット元帥が首相に就任。独裁体制を敷き、議会制民主主義を放棄。
1963年12月	サリット首相病死でタノム副首相が後継。
1971年11月	軍部の無血クーデターで国政評議会（ＮＥＣ）による軍政に復帰。
1972年11月	日本製品不買運動盛り上がる。これを契機に反軍政独裁運動がタイ全国学生センターとして結集。
1973年10月	学生と軍が衝突。流血革命でタノム軍事政権打倒。タノム氏らは国外逃亡。
1976年10月	血の水曜日事件（６日）。タノム元首相強行帰国反対集会でタマサート大に集まった学生と極右の衝突を口実に警官隊突入、少なくとも46人が死亡。同日、軍クーデターでセニ内閣打倒、タニン内閣が発足。
1977年10月	再び軍事クーデター。クリアンサク軍最高司令官が首相に就任し、４年ぶりの軍政復帰。
1980年２月	クリアンサク首相辞任。翌月プレム陸軍司令官が後継首相に就任。
1988年８月	プレム長期政権退陣。総選挙で第１党になったタイ国民党チャチャイ党首が首相に。
1991年２月	スントン国軍最高司令官ら軍部による無血クーデター。チャチャイ政権を打倒、議会も閉鎖、再び軍政に戻る。
1991年12月	制憲議会が新憲法承認。
1992年３月	総選挙実施。国軍支持５政党は、連立政権樹立と第１党正義団結党のナロン党首を首相選出に合意するが、直後に同党首の麻薬取引関与疑惑が浮上し、ナロン擁立断念。
1992年４月	国軍支持５党、スチンダ国軍最高司令官の首相擁立で合意。スチンダ内閣が発足。

「民主的憲法を早く」「混乱の根は残った」

バンコク市民の声

【バンコク21日＝当間敏雄】プミポン国王による国民和解の訴えで鎮静化、新たな局面を迎えたタイ情勢をめぐり、バンコク市民各層の声を二十一日、街角で拾った。

会社員サンティさん（五二）「国王の調停で事態が収拾されほっとしている。スチンダ首相はやりすぎたと思う。潔く身を引くべきだろう。首相は、やはり民選議員から選ばれるべきだと思う。憲法を早く改正して、より民主的なものになるよう願っている」

弁護士ウォンエンヤイさん（三三）「国王の登場で一応事態は鎮静化したが、混乱の根は残ったままだ。国会での憲法改正審議が紛糾するようなことになれば、市民は再び街頭に出て大規模な抗議行動を展開するに違いない。それにしても、あれほど勇ましいことを言っていたチャムロン氏がスチンダ首相と一緒のテーブルに着いたのにはびっくりだ。もう、彼には市民を指導する資格もなければ、抑える力もないだろう」

公務員チャラポンさん（五七）「政治家は政争と汚職に明け暮れている。民主化を口にしながら、その裏では権力闘争ばかりだ。政治と国の安定のためにはスチンダ首相のような人物が必要だ。民主化要求デモに参加した人々の気持ちは理解できないこともないが、公共施設を破壊するなど暴徒化、首都の治安を乱したのは許せない。軍の発砲もある程度はやむをえない部分もあったのだろう」

学生ユッタナさん（一九）「今、軍当局から身柄を解放されたばかりだ。僕は十五人のグループで行動していたが、このうち三人が射殺された。仲間の話によると行方不明者は一万人にのぼる。政府
数を四十人
ているよう
院に運ばれ
数だけだ」

自営業ピ
（三二）「スチ
人間じゃな
妥協したチ
う信用でき
れて死んだ
真の民主化
闘い続ける